



どうにかする力

泗水小学校だより
R4. 10. 11(火)
No. 26
校長 工藤竜一

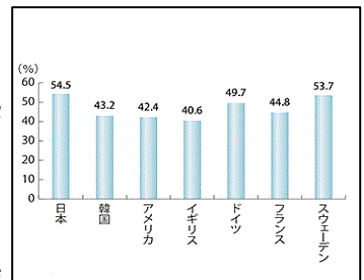
【校訓】 なかよく つよく しんけんに
【学校教育目標】 自立する泗水っ子の育成
～「生きる力＝どうにかする力」を育む教育活動を通して～

自己有用感の育成を目指して～「ほめる」こと・「認める」こと～

学校だより No. 15 の ☆校長室から独り言 13☆ では、山本五十六の言葉を引用しながら、子どもたちに自己有用感の育成を目指したいと書きました。

平成30年度の内閣府の調査によると、日本人は諸外国と比べて自己肯定感が低いことが明らかになりました。特に、10代後半から20代前半の世代において、諸外国との差が大きい結果となりました。一方で、「自国のために役立つと思うようなことをしたいか。」という自己有用感につながるような質問では、日本人は、世界でも高い値を示しました。

自国のために役立つと思うようなことをしたい



「自己肯定感」と「自己有用感」は、しばしば似たような場面で使われますが、実は違うものです。日本とアメリカの発達期待を調べた調査研究によれば、アメリカの幼稚園・保育園の先生や保護者は、「自信を持てる子」になることが最も大切だとしました。それに対して、日本では、「共感・同情・他の人への心配りができる子」になることが最も大切だとしました。求められる人間像が大きく違うことがわかります。文化的な背景が違いますので、日本では、「ほめて育て」て自己肯定感を育てるということよりも、「認められて育つ」ことで自己有用感を育てるということの方が適しているのではないのでしょうか。

「人の役に立った」「人から感謝された」「人から認められた」という自己有用感は、自分と他者（集団や社会）との関係を自他ともに肯定的に受け入れられることで生まれる、自己に対する肯定的な評価によって育まれるものです。

学校では、様々な人間関係が生まれてきます。人との関わりを通して、進んで協力できた、自分から働きかけができた、誰かの役に立つことができた、という集団の一員としての自信や誇りの獲得が重要です。教師が子どもを、親が子どもを、あるいは子ども同士が認め合いながら、自己有用感を獲得していき、その過程で自己肯定感も高まっていくという教育が、日本の子どもたちの成長においてとても大切であると私は思います。

☆校長室から独り言 23☆

10月10日「目の愛護デー」によせて…

私はメガネをかけています。しかし、子どもの頃から視力が低かったわけではありません。大学に入学した際の健康診断では、視力2.0でした。多くの大学生は、大学入学時は、受験勉強で視力が低下しているものですが、私は抜群に良かったのです。ところが、大学時代に、コンピューターで情報処理をすることを盛んに行うゼミに入り、卒業論文作成のために、暗い部屋で暗い画面を毎日長時間見続けるような生活をしました。それで、卒業の頃には視力が一気に低下し、メガネをかけることになってしまったのです。

日本眼科医会のホームページによると、今の子どもは近視が増加してきており、「疫学データの蓄積から、近視が将来の目の病気の罹患率に与える影響が大きいことがわかりました」と記載されています。目の病気とは、白内障、緑内障、網膜剥離などで、進行すれば失明の危険がある病気です。近視の人は、白内障で2～5倍、緑内障で4～14倍、網膜剥離で3～22倍です（いずれも近視度数が高いほど病気の罹りやすさも高くなる）。

では、近視の予防にはどんなものがあるのでしょうか。ホームページには、「日光にあたり、外で遊ぶことが最も近道かつ確実な方法」とありました。必ずしも直射日光のもとで過ごす必要はなく、近視予防に十分な照度（1000～3000ルクス以上）で1日2時間は外にすることが有効です。外国の学校では、1日2時間は外にすることを子どもに義務づけているところもあるそうです。

後期の学校生活でも、視力と体力の低下を防ぐために、外遊びを奨励したいと思います。